



あけぼの

第46号 2020. 3. 1

宇和特別支援学校

(知的障がい部門)

図書館発行

読書感想画 作品展



「14ひきのあきまつり」
小四星 三瀬翔大



「いっばいたへて

へくしん☆」

小一月 株田 悠都

上甲 陽大

西村 琉征

藤田 風介

松浦 孝太



「ブレイメンの仲間たち」

小三月 沖田 聖翔

塩見 蓮

増田 煌大

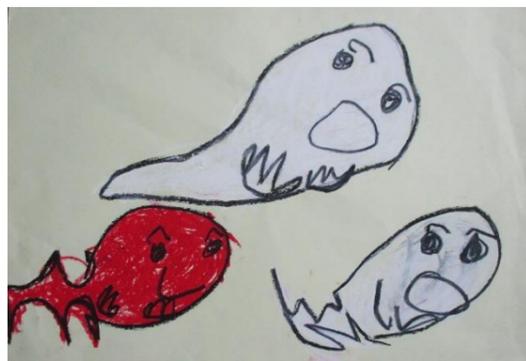
東 優月

小三星 松下 晟風



「おしくらまんじゅう」

中一B 菊池 健斗



「14ひきのひつし」

中一B 吉良 星



「お手本ロボット51号」

中一A 山本 光輝



「どりかえりごっこ」

中二A 藤井 飛駆



「時間泥棒」

教頭 平野 宗義



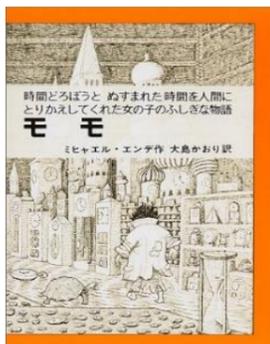
目に見えるものは、それが存在しなくなったら、なくなったことがすぐにわかります。大学時代、大講義室の入口に置いていた私のお気に入りの傘は、講義の途中で雨模様になった日になくなってしまいました。大学に入学する前に母親が私に買ってくれた大切な傘だったので、とても残念でした。「ちょっと拝借」と軽い気持ちで傘を持っていった人を傘泥棒と言えば大げさかもしれませんが、最近、じわじわと自分に悔しい思いをさせる泥棒がいることに気付きました。それは、時間泥棒です。

時間というものは目に見えません。だから自分の時間が浪費されたり盗まれたりしても自覚しにくいのです。しかし、ここ数か月前から、時間が盗まれていくことに気付かせてくれる通知が届くようになってきました。私の使っているスマートフォンは、一昨年九月にOSがアップデート

トされて以来、週に一度の通知を見れば、今週どれだけスマートフォン画面を見ただか、どのアプリの使用時間が長いのか、レポートという形で表示されるのです。その宣告日時は、毎週日曜日午前九時。「こんなに何時間もスマホの画面を見ていたのか！」と反省させられるのです。ある休日の夜、家族四人全員がスマートフォンとタブレットを見ている瞬間がありました。私は動物的な直感で「これはマジ」と思いました。「人と向き合わず、画面に向き合う人間、本当にこれでいいのか。」と我に返ったのです。どこかで聞いた、「情報端末に時間を奪われる人間たち」という言葉を思い出しました。「自分で好きなことをしているのだから、時間を『奪われる』と表現するのは間違っている」と思うなら、もうそれは、スマホという時間泥棒に心まで奪われているに違いありません。

次のように言っています。「時計というのは、人間一人一人の胸の中にあるものを、極めて不完全ながらも、まねて象(かたど)ったものなのだ。(中略)人間には時間を感じとるために心というものがある。そして、もしその心が時間を感じとらないようなときには、その時間はないもおなじだ。」この本は、人間たちに「時間を節約させることで、時間を時間貯蓄銀行に奪っていき、人の心のゆとりがなくなっていく様子を描いています。まさに時間の使い方について考えさせられる一冊です。

インターネットや情報端末が充実する今日、「時間をどのように使うか」について、もう一度立ち止まって考える時期にきているのではないかと思います。皆さんの読書の時間はどのくらいですか。スマートフォンで動画サービスやオンラインゲーム等のための時間を減らして、ぜひ本と向き合う時間を作ることを願っています。





読書感想文



「車いすテニスで世界チャンピオンに」を読んで

中学部二年A組 中川 凜

みなさんは、車いすテニスプレイヤーの国枝慎吾選手を知っていますか。ぼくは総合学習の授業をきっかけに伝記を読み、衝撃的なフレーズを目にしました。それは「障がいを持ってよかった。」という言葉です。

ぼくは小学校2年生のとき脳梗塞になり、以来、障がいと共に生きることになりました。よくよしても仕方がないので、自分にできることに懸命に取り組みました。家族や友達も、ぼくを応援してくれました。幸福や充実を感じる場面も、たくさんありました。しかし、心の中の奥から「なぜ自分だけが」「もしも障がいがなかったら」という思いが消えることはありませんでした。

そんなぼくにとって、国枝選手の言葉は、まさに理解不能でした。国枝選手はなぜ「障がいを持ってよかった」と思うのか。ぼくは伝記の中からその理由を見付けることができました。「もし、あのとき病気にかからなかったら、こんな感激を味わうことはなかったかもしれない。ぼくは、ぼくの頑張っている姿を見せることで、障がいをもつ子どもたちを励ましたい。それがぼくの新しい夢です。」パラリンピックで金メダルを獲得した国枝さんの言葉です。ぼ

くは、この言葉を読んで、やっと謎が解けたような気持ちになりました。大切なのは、障がいがあるかないかではない。感激を味わうに値するだけの過程を踏んできたかどうか。そして、今の自分を受け入れ、今の自分にしか叶えられない夢を持っているかどうか。このふたつのことを持って初めて「障がいを持ってよかった。」と思えるのだと思います。

正直に言って、残念ながら今のぼくに国枝選手のような感激や夢はありません。だから「障がいを持ってよかった。」とは、まだ言えません。ですが、これから先の人生、すべては自分次第です。ぼくは努力を続けていくと決めました。いつの日か、自信を持ってこの言葉を言える自分になるために。

「うさぎのユック」を読んで

高等部一年D組 野間 穂乃実

わたしとこの本との出会いのきっかけは、図書館でかわいい絵の表紙が目についたからです。左の耳の先に、金色の星形のしるしがあるうさぎの絵の表紙でした。

この本は、うさぎのユックが障がいに負けないで、兄弟姉妹と協力してがんばって生きていく話です。ユックは生まれた時から心臓が弱く、後ろ足もほとんど動かないうさぎでした。でも、『ゆっ

くりとよく考えながら一つずつ決断して生きていくように』という天の声からユックという名前をもらいました。

この本を読んで、わたしはユックのことをがんばっていると思いました。なぜそのように心に残ったのか、理由を書きます。

ユックは、生まれつき後ろ足と心臓が弱いのに、知恵と勇気を持ってライオンと戦ったからです。兄弟姉妹みんなで力を合わせて協力して、ライオンを追い払うことができました。「絶対全員で助かるんだ。」とあきらめず、みんなで生きられることを信じ続けたところが心に残りました。心臓が弱いユックにとっては、毎日生きていられることそのものが奇跡で、一日一日が「いのちの記念日」なのだとすることも分かりました。

物語の最後にユックは「命をありがとう。僕、これからもみんなのことをよく考えて、ゆつくりと生きていくよ。」と言います。この言葉を聞いて、どんな状況でも希望を持ち続けるユックは、えらいなと思いました。

この本を読んで、私は、障がいがあっても自分のペースでがんばることが大切だと思いました。それと、助けてくれる周りの人たちへの感謝も忘れてはいけないと思いました。この本を選んで良かったです。



「かがみの孤城」を読んで

高等部二年H組 宇都宮 莉緒

私がこの本を読んだのは、母から薦められたからです。読んでみて、自分なりに深いなあと感じたり、私もこんな経験があるなあと共感できたりしたところがいくつもあったので、この本の感想文を書きたいと思いました。

この本で私が共感したところを、いくつか紹介したいと思います。

一つ目は、友達関係です。この本には、主人公と友達との関係が、相手の気持ちが分からないことによつてどんどん崩れていってしまう場面が書かれています。私はその場面を読んで、「私にもあったなあ。」と、その時の後悔や辛い気持ちを思い出しました。そして、今、私のそばにいてくれる友達を、もっと大切にしようと思いました。

二つ目は、いじめです。この物語は、主人公がいじめを受けて学校へ行けなくなるところから始まっています。主人公はいじめっ子から無視され、陰口を言われ、みんなから孤立するように仕向けられ、いろんなことをされていきました。私はこの場面を読んで、「自分も同じことをされたから、主人公の気持ちにはよく分かる。」と思いました。もう過去のことなのに、このような経験を思い出すと、今でも胸が苦しくなります。

三つ目は、人を助ける勇気を持つことです。この本の最後には、主人公が命を落とすかもしれないのに、鏡の中の友達を助けに行く場面があります。私

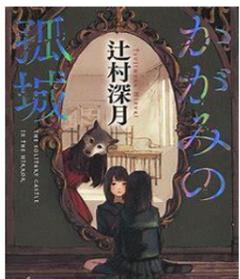
多読賞

本校では、「児童・生徒の読書意欲を高める」ことを目的として、毎年多読賞の表彰を行っています。

選考基準は、四月から一月までの貸し出し冊数が、小学部は二十冊以上、中・高等部は五十冊以上です。

今年度は四名の生徒が表彰されました。

- 高等部 一年A組 奥谷 維吹 50冊
- 高等部 一年B組 赤松 龍馬 85冊
- 高等部 一年B組 橋本 壮真 70冊
- 高等部 二年A組 森岡 麟太郎 50冊



は、人を助けられる人間になりたいと思っていますので、この場面を読んで、「やはり、人を助ける行動と勇気は、生きていく上でとても大切だ。」と思いました。そして、私も、人を助ける勇気を持つて行動しようと思いました。

図書委員会活動の紹介

本校の図書委員会は、高等部一年生〜三年生の十八名で活動しています。

主な活動は、月に一回の委員会とお話会、週に一回の昼休みの図書貸し出し当番などです。昼休みや、委員会の時には図書の整理も行っています。

毎月のお話会では、図書委員が絵本のページを分担し、練習をして本番に臨んでいます。お話会には、いつもたくさんのお話会が聞かれます。来てくれて励みになっています。

僕は3年間、図書委員をしました。一番思い出に残っているのはお話会です。ミュージカルで鍛えた声で、皆さんに楽しんでもらえるよう頑張りました。よい経験になりました。

3年F組 寺谷 和真

